
声無き想い

TAKA丸

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声無き想い

【Nコード】

N3668A

【作者名】

TAKA丸

【あらすじ】

心ある者と心無い者。その境界線は細く……。

僕は子供の頃から無口で、あまり他人と関わる事が得意じゃなかった。

いや……と言うより、他人と関わりあって煩わされるのが嫌いだったんだと、今はそう思う。

だから、いつも一人で、自分が造った人形で遊んでいた。

恐れていたと言ってもいいだろう……。

とにかく僕は、誰かに触れられるのさえ怖かったんだ……きっと……。

そんな僕が人形に興味を持つようになったのも、自然といえば自然な流れだったのだと思う。

何しろ余計な事は言わないし、何より僕の期待した通りの答えを返してくれるんだ。

人形は僕にとって、掛け替えの無い者になって行った……。

でも、僕にだって人を好きになった経験はある。

温もりを求めた時代がある。

そう……あれは高校生になったばかりの頃だったろうか……。

長い髪……しなやかな肢体……見る度に胸がときめいた。

同じクラスになれた事を神様に感謝した。

そんな事は生まれて初めてだった……。

恋……なんだろうと思う。

何しろ今まで経験が無かったのだから、それが恋かどうかなんてはつきり解らなかったんだ。

けれど、友達もいなかった僕にはそれを相談出来る相手などいる

筈も無く、勿論その子に声をかけるなんて事も出来ず、三年間ずっと想いは燻ったままだった……。

高校を卒業すると僕は就職、彼女は進学と、それぞれ歩む道が違った。

そのまま彼女の顔を見る事も無くなり、僕の中の想いはそのまま静かに消えて行く筈だった。

就職してからも、僕は相変わらず人付き合いが苦手なままだった。しかし、どこにでもお節介な人というのはいるもので、何かにつけて僕を誘う男が同僚にいた。

何度断つてもしつこく誘われて根負けした僕は、渋々付き合いで居酒屋へ行く事になった。

もつとも、僕だって人並みにお酒くらいは呑む。

ただ、静かに一人で呑むのが好きなのだが……。

でも、その店の暖簾を潜った瞬間、僕は同僚の男に感謝したい気持ちになった。

「いらつしゃいませ！ お二人様ですか？」

彼女だ……。

学生時代、僕がずっと焦がれていた彼女が目の前にいた。

「あれ……？ あー！ もしかして！」

驚いた事に、彼女は一度も口をきいた事の無い僕の事を憶えていた。

何故、彼女が僕の事を憶えているのかなんて、そんな事はどうでも良かった。

理屈抜きに嬉しかった……。たったそれだけの事が、たまらなく嬉しかった。

「や……懐かしいね、元気だった？ 確か就職したんだよね？ 同窓会に来なかったから、どうしてるかなって思ってたんだ」
同窓会？ そんなのがあったのか……。

僕の所には知らせが来なかったんだよ……。

「ちよつと……忙しかったんだ」

初めて彼女と話せた。

でも、初めての会話が嘘か……。

「君はバイトしてるの？」

我ながら馬鹿かと思った。

何て下らない事を訊くんだろう……。

「うん、まだ勤め始めたばかりだけどね。学費は親持ちだから、

お小遣いくらいは自分で稼がないとって思つて」

「そうなんだ、偉いんだね」

「あ、ごめんなさい！ お席へご案内します、どうぞ」

店の奥から店長らしき人の声がして、彼女は一瞬で同級生から店員に戻った。

もう少し話していたかったのだが、それは仕方ない。

座敷になつてゐる席へ案内され、靴を脱いで座布団に座ると開口一番、同僚の男は僕に訊いて来た。

「可愛い子だな、知り合いか？」

「うん、高校の同窓生なんだよ」

「へえ……今フリーかな？」

「どうだろうね……」

やめてくれよ……。

「ちよつと声かけてみるかな？ 俺さ、ああいう子って好みなんだよ」

やめてくれつてば……。

その時、彼の携帯電話が鳴った。

「何だよ……はい？ ああ、今、居酒屋にゐるんだ。え？ 違う

よバカ、男と一緒にだ」

どうやら恋人からの電話らしい。

どうして恋人がいるつていうのに、他の女性に声をかけようなんて思ふんだろう……。

「あ？ 何で……解った解った！ 喚くなようるせえな……おい、ちよつと出てくれよ」

「え？ 僕が？」

「ああ。本当に男と一緒になのかどうか、証明しろって言いやがってさ……ったく！」

僕は恐る恐る彼から携帯電話を受け取ると、それを耳に当てた。

「もしもし？ あ、はい、そうです。僕は彼の同僚で……いいえ、普通の居酒屋ですけど」

彼の恋人は捲し立てるように、矢継ぎ早に僕に色々な質問をぶつけて来た。

「はい、何の変哲も無い、普通のお店ですよ。 え？ 場所ですか？ えっと……バス通りの」

「おっと！ 余計な事は言わなくていいんだよ！」

そう言つと、彼は僕の手から携帯電話を奪い取り、通話口をガシヤガシヤと擦つたと思ったら、いきなり電源を切ってしまった。

「ふう……危ねえ危ねえ」

「どうしたんだい？ 突然……」

「バカ！ せっかく可愛い子を見つけたのに、この場所なんて教えてみる。 通えなくなっちゃうだろうが」

「どうして？ 呑みに来るだけなんだから、そんなに気にしなくても……」

「勘繰られたら色々やり難いだろうが。 携帯はお前が落として壊した事にしとくからな」

僕は不実な事が嫌いだ。

そして、不実な事をする人間も嫌いだ……。

彼女が注文の品を運んで来る度、彼は何かと話しかけていた。

彼女は嫌な顔一つせずに、それに逐一答えていた。

何故だろう……僕はそれがとても厭だった……。

それからの僕は、毎日その居酒屋へ通った。

彼女が休みの日以外、毎日欠かさず……。

いつもそこへ行けば、彼女は笑顔で迎えてくれた。

僕にとって、そこは樂園だった……。

だけど、そんなある日……。

「この間あなたと一緒に来た人、あの人って面白いね」

彼女は、僕の同僚の事を話し始めた。

「遊びに行こうって誘われてさ、面白そうだからOKしちゃった」

面白そうだから……？

たったそれだけの事で……？

「会話のテンポがいいって言うのかな？ とにかく退屈しないのよね」

その日呑んだお酒は、何の味もしなかったように思える。

このままでいいのか？

このままだったら、僕はただの同窓生で終わってしまうんだぞ？

僕には「それがお前にお似合いだ」という声と、「頑張っ

て彼女を誘ってみろ」という声が聞こえていた。

それが誰の声なのかは判らないが……。

そして……。

僕は店が終る時間を見計らい、思い切って彼女を誘ってみる事にした。

駄目かもしれない……でも、それで何かが変わるかもしれない。

僕は変われるかもしれない……。

電柱の陰で、僕は彼女を待った。

そろそろ店もおわる時間だ……そう思った時、彼女が店の裏手から出て来るのが見えた。

思い切って声をかける為に電柱の陰から出ようとした時、彼女の携帯電話が鳴った。

「はい……ああ、何だ。 うん、今終わったとこ。 ……え？ うん、

相変わらず毎日来てるよ」

毎日来てる？

ひょっとして僕の事かな……？

「うん、失敗したな〜って思ってるんだ〜……。いや、懐かしかったのは本当なだけだよ。え？ やだあ、冗談やめてよ！ 何であたしが、あんなのと付き合わなきゃなんないのよ」

あんなの……？

それ、僕の事かい……？

「いるんだかいないんだか、全然存在感無かったじゃん？ あたし一度も喋った事無いしさ、どんな声してんのかな？ って思ってたよ。そうしたら懐かれちゃってさあ！ あははは！

野良犬に餌あげたら付いて来ちゃったって感じだよ」

野良犬か……。

僕は……野良犬と同じなのか……。

「それよりさ、ちょっと面白い男見つけたんだ。結構金回り良さそうだから、色々貢いでくれそうだよ。……まさかあ！ そんなに簡単にはさせないよ。とりあえず様子見かな？ え？ ああ、あいつは嫌。あたし、プライドは売らないの」

僕は静かに彼女へ歩み寄った……。

「なあ、お前さ、彼女と友達なんだろう？ 何か知らないか？」

休み明け、同僚の男は僕に訊いて来た。

「いや、僕は単なる同窓生さ。話したのもあれが初めてだしね。で、何かあったのかい？」

「昨日、約束の場所に来なかったんだよなあ……。携帯も繋がらなかったしさ」

「そうなのかい？ じゃあ何か急用でも出来たんじゃないかな？」

「店の方にも連絡無しで休んでるって言うしさ。俺、フられちゃったのかな？」

「いいじゃないか。君には恋人がいるんだろ？」

「それはそうだけどよ……たまには違ったのも拝みたいじゃないか」
「そんなものかい？ 僕には理解出来ないな」

本当に……僕には人間が理解出来ない……。

あれから僕は居酒屋に通うのをやめた。

行ってもつまらないし、何よりお金の無駄だと気付いたからだ。
そんな事に使うより、僕は彼女の為にお金を使いたいんだ。

「ただいま」

返事が無い事は解っている。

僕は一人暮らしなのだから。

でも、僕を迎えてくれる存在はある……。

「今日も何事も無く、普段と変わらない一日だったよ。平和が一番いいね」
平和が一

僕は、その硬い唇にそつと口付けた。

彼女の表情はいつも変わらない。

手も足も動かしてはしない。

でも、僕にとっては掛け替えの無い、大事な宝物。

今、殺風景な僕の部屋には、物言わぬ人形が一体……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3668a/>

声無き想い

2010年10月8日11時28分発行